

平成 21年 6月 9日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）  
 研究期間：2007～2008  
 課題番号：19820008  
 研究課題名（和文） 環オホーツク海・環ベーリング海地域における  
 海獣狩猟文化の成立・変容過程の研究  
 研究課題名（英文） Formation and Transformation Process of the Marine Mammal  
 Hunting Culture at circum-Okhotsk and circum-Bering Sea Area  
 研究代表者  
 高橋 健（TAKAHASHI KEN）  
 東京大学・大学院人文社会系研究科・助教  
 研究者番号：20451776

## 研究成果の概要：

本研究では標記の目的を達成するために、代表的な海獣狩猟具である骨角製銛頭に注目して研究を行なった。単に表面的な形態を比較するだけに留まらず、遺物の徹底的な観察に基づいて、製作から廃棄に至るプロセスを具体的に復元することを目指した。また銛頭の機能的側面を考察するためのバックデータを得るために、礼文島における現代のトド猟に関する聞き取り調査と銛頭の製作・使用実験を行なった。

## 交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,320,000	0	1,320,000
2008年度	1,350,000	405,000	1,755,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,670,000	405,000	3,075,000

研究分野：人文社会系

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：海獣狩猟、骨角器、オホーツク海、ベーリング海

## 1. 研究開始当初の背景

北方海獣狩猟民の研究においては、銛頭の特徴的な道具である骨角製の銛頭が古くから注目されてきた。銛は水域での狩猟において獲物を倒すと同時に倒した獲物を回収するために工夫された刺突具であり、銛頭はその先端部分である。機能的に複雑な形態が必要とされ変異に富んでいることや比較的残存しやすいことなどの理由によって、考古学的に扱いやすい資料だとされている。しかし土器や石器と比較すると、骨角器の型式学的研究を行なうための理論的整備は十分に行なわれているとはいいがたく、ともすれば表面的な印象に左右されるきらいがあった。こ

のような状況を克服するため、研究代表者である高橋は、遺物から製作・使用・廃棄のプロセスに関わる情報をいかにして読み取るかという方法論の確立に注意を払って研究を進めてきた。研究開始時点において、すでに日本列島内（北海道と東北地方）での資料観察に基づいた成果が得られており、アラスカの資料についても同様の分析方法が適用可能だとの見通しを得ていた。

日本考古学においては、北海道に展開した文化の様々な要素について、「北方系」ないし「大陸系」という説明が行なわれることが多かったが、それが必ずしも正鵠を得たものではなかったことが近年指摘されている（福

田正宏 2007 『極東ロシアの先史文化と北海道』北海道出版企画センターなど。環ペーリング海のアラスカやアリューシャン列島の諸文化についても、かつては北海道のオホーツク文化との類似が指摘されたこともあったが、現代の日本考古学においては両者に直接の系統関係や接触関係があったと主張する研究者は少ない。一方でこれらの地域における物質文化の内容が時に非常に類似した様相を示し、漠然とした関連性が想定されてきたことも事実であるが、古い調査による出土品が多くデータが十分ではなかったことや、骨角器研究における方法論的な問題もあり、この点が十分に追及されてきたとはいえない状況にあった。

## 2. 研究の目的

本研究では環オホーツク海および環ペーリング海地域を対象として、先史時代以降展開した海獣狩猟文化の成立・変容のプロセスを考古学的に解明することを目指した。海獣狩猟は高度に発達した技術と社会組織を必要とするため、その研究の射程は単に生業研究の枠内には留まらず、北方狩猟民社会の本質を明らかにすることにまで及ぶ。人類史的視点からみた場合の狩猟研究は、食料獲得手段としての価値だけではなく、社会組織や行動原理の発達プロセスを解明する上でも注目されている。高度に発達した当該地域海獣狩猟文化は狩猟文化の一つの頂点をなしており、その成立と変容のあり方を明らかにすることは、人類史のより深く豊かな理解へとつながるものである。また研究を遂行する過程を通して、骨角器研究の方法論を整備・構築することも、本研究の目的の一つとなっている。

## 3. 研究の方法

本研究においては、海獣狩猟に用いられる道具のうちでも最も特徴的な器種である銚頭について、遺物の緻密な観察に基づいた技術形態学的な分析を行なった。広大な面積をもつ対象地域を効率よく調査するため、環オホーツク海地域の最南部に位置する北海道と環ペーリング海地域の最北部に位置するセント・ローレンス島を重点的な調査地域として選定した。また千島列島は両地域の関連を考える上でも重要な地域であるが、信頼できる考古資料に乏しい地域でもある。本研究では、いわゆる鳥居龍蔵コレクションとして学史上も重要な東京大学総合研究博物館の千島列島出土資料を再整理し、現代的な水準での研究資料として提示することを目指した。また遺物レベルの情報から人間の技術・行動のレベルにおける解釈を引き出すためのミドルレンジセオリーの構築を目指して、実験考古学的研究と民族考古学的調査を行

なった。

## 4. 研究成果

### (1) 各地域の資料調査

環オホーツク海地域では、道東北部を中心とする北海道と千島列島の出土資料を調査の対象とした。オホーツク文化期の網走市モヨロ貝塚においては、同貝塚では、中央部で折損した開窩兼用式銚頭をブランクとして利用するような再加工プロセスが存在したことが分かっている(図書)。同貝塚におけるA群銚頭の長さの分布をみると、再加工の痕跡を残す資料(白抜き部)が二峰性分布の左のピークに含まれていることが分かる(図1)。このピークにはある程度の量の再加工品が含まれていた可能性があり、再加工が頻繁におこなわれていたことを示唆している。同時期の他遺跡の事例と比較した結果、このような再加工プロセスはオホーツク文化に特徴的なものである可能性が高い。さらに近年の発掘調査の出土資料を検討した結果、鯨骨製の骨斧から釣針への転用品の存在が明らかとなった(雑誌論文)。これらの成果はオホーツク文化における破損・再加工を組み込んだ骨角器の運用システムの実態を解明する手がかりとなるだろう。

このほかに北海道における縄文時代からアイヌ文化期の銚頭の編年的研究を行なった(図書)。特に擦文文化期からアイヌ文化期にかけての変化は全道で画一的に進行したわけではなく、17世紀頃までは道東と日本海側の二つの地域に大きく分かれていたことが判明した。

東京大学総合研究博物館の千島列島資料は、鳥居龍蔵による明治32年の占守島・幌筵島での採集品などから成る。土器・石器・骨角器などから成る約400点の資料の観察・図化作業を行なった。近年の調査成果によって、北部・中部千島における13~17世紀の居住断絶期の存在が指摘されているが(手塚

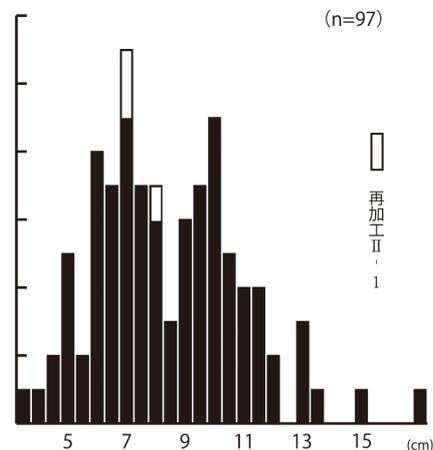


図1 銚頭の長さ分布(モヨロ貝塚)

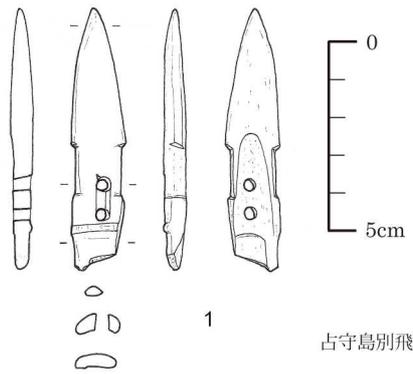


図2 再加工の痕跡を残す資料(北千島)

薫・B.フィッツヒュー・V.シューピン 2009 「千島列島への移住と適応 KPP2008 の成果から」第10回北アジア調査研究報告会(それに後続するアイヌ文化期の資料が主体であった。この断絶期以前に北千島に広がっていたいわゆる「オホーツク文化」の性格については議論があるところだが、占守島出土の開窩分離式銚頭の中にはモヨロ貝塚と同様の再加工の痕跡を残す例があり(図2:北海道大学植物園博物館所蔵資料)。両地域間の関係が表面上の類似に留まらないことを示している。

環ベーリング海地域ではアラスカ大学所蔵のセント・ローレンス島オクヴィク遺跡、国立自然史博物館所蔵の同島ギャンベルの出土資料を対象として資料調査を行なった。いずれも1930年代までに収集された学史的に重要な資料だが、これまで全容が報告されていなかった。従来行われてきたような編年論・系統論とは異なる観点からの観察と分析を行なった結果、オクヴィク期における破損・再加工パターンを抽出することができた。さらに閉窩回転式という点で共通する構造をもつ日本列島縄文時代晩期の燕形銚頭(岩

手県大洞貝塚出土資料)と破損パターンを比較した結果、両地域において顕著な差がみられることが明らかとなった(図3)。この違いは再加工の頻度や工程の違いとも結びついており、セイウチ牙と鹿角という素材選択の差と関わっている可能性が高い(雑誌論文、学会発表)。

### (2) ミドルレンジセオリーの構築

木製/鹿角製のレプリカと現代の鉄製銚頭を用いて、肉/ゼラチンを対象とした銚頭の使用実験を行なった。回転式銚頭の運動に関わるメカニズムについては、基本的には従来の理解や聞き取り内容を裏付ける結果が得られている。ただしデータの蓄積が不十分であり、今後より実際の使用状況に近い条件を再現して行なう必要がある。

北海道北部の礼文島における現代のトド猟についての民族考古学的調査を行なった。悪天候のために実際のトド猟への同行調査を行なうことはできなかったが、これまでの調査で踏み込むことができなかった解体や利用の側面に焦点を当てて聞き取り調査と記録を行なった。

### (3) まとめ

寒帯・亜寒帯の冷涼な気候が卓越し、鰭脚類が繁殖・回遊する環オホーツク海・環ベーリング海地域においては、海獣狩猟が生業として重要な役割を果たしてきた。本研究では資料が豊富に蓄積されている地域の様相を整理したのちに地域間比較を行っていくという研究戦略に基づき、環ベーリング海ではセント・ローレンス島、環オホーツク海では北海道を両極として設定し、中間に位置する北千島にもう一つの軸を置いて広域的な比較分析を行なった。銚頭のように高度に機能的な道具の場合、機能的要因から類似した形態が生じた可能性を常に考慮する必要がある

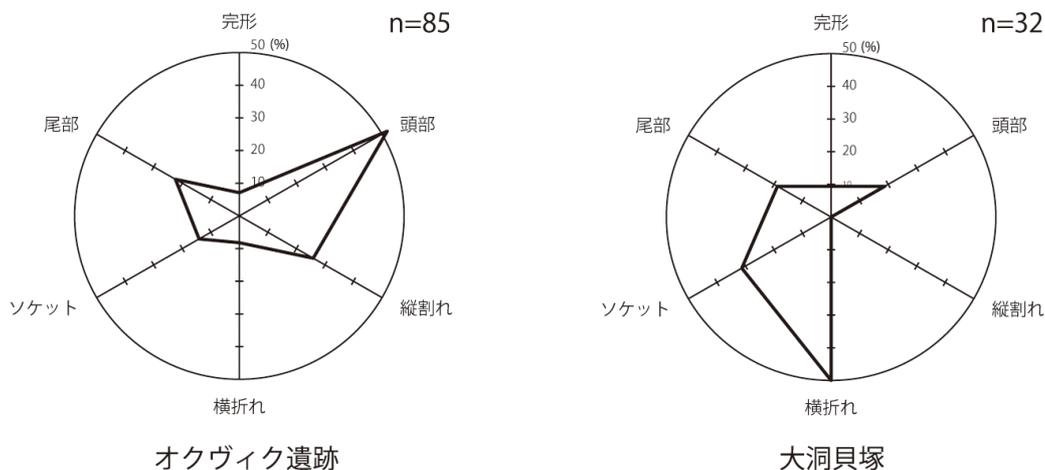


図3 銚頭の破損パターンの比較

る。遠隔地の資料を直接対比することによって生じる誤りを回避するためには、中間地域の様相を把握することと、縦軸となる編年を整備することが欠かせない。本研究ではこれに加えて、資料の徹底的な観察によって製作から廃棄に至るプロセスを復元し、ある特定の属性がどのような要因によって生じているのかを見極めることに努めた。

従来の研究成果を含めて検討すると、環ベーリング海地域のうちアリューシャン列島からアラスカ、チュコト半島にかけての地域に広がるエスキモー・アリュート系の海獣狩猟文化と、オホーツク海北岸からサハリン、北海道、千島列島にかけての地域に広がるオホーツク系の海獣狩猟文化という大まかな構図が成立する可能性が高い。両系統の海獣狩猟文化の間には、例えば 19 世紀の露米会社による「アリュート」の千島移住のような散発的な接触は存在したものの、基本的には独立した発達過程をたどったものだと考えられる。

従来の銚頭研究は、装飾や形態の文化史的比較という観点から行われることが多かった。これは銚頭研究の先進地を自負しているアラスカの考古学界においても同様である。本研究において行なった分析にもまだ不十分な点が多いが、このようなアプローチによって機能論的・技術論的側面を掘り下げる可能性を示すことはできただろう。ある程度のサイズをもつ資料全体を精査する必要があるために、事例を増やすのが難しい側面があるが、今後も着実にデータを蓄積していきたいと考えている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

高橋 健、東京大学文学部列品室の北方関連資料、Arctic Circle、65 号、12-13 頁、2007、査読無

高橋 健、北千島出土の銚頭について、アイヌ民族・オホーツク文化関連研究論文翻訳集、1-7 頁、2008、査読無

高橋 健、モヨロ貝塚出土の骨角器について、『史跡最寄貝塚』網走市教育委員会編、320-336 頁、2008、査読無

高橋 健、オクヴィク遺跡における銚頭の再加工について、菊池徹夫先生古希記念論集(仮題)、投稿中(掲載確定) 査読無

[学会発表](計 3 件)

Takahashi Ken, Harpoon head reprocessing in Okhotsk culture,

35<sup>th</sup> annual meeting of the Alaska Anthropological Association,

March 1, 2008, Anchorage, Alaska.

高橋 健、続縄文時代の骨角器：銚頭、北海道考古学会 2008 年度研究大会、2008 年 4 月 26 日、札幌大学

高橋 健、アラスカ・セントローレンス島出土の銚頭、北アジア調査研究報告会、2009 年 2 月 22 日、東京大学

[図書](計 2 件)

高橋 健、『縄文時代の考古学 5』「北海道沿岸の海獣銚頭」、113-130 頁、2008、同成社

高橋 健、『日本列島における銚頭の考古学的研究』、全 289 頁、2008、北海道出版企画センター

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 健 (TAKAHASHI KEN)

東京大学・大学院人文社会系研究科・助教

研究者番号：20451776